

理解の問題と発話産出の問題

——理解チェック連鎖における「うん」と「そう」——

串田 秀也
(大阪教育大学)

キーワード

修復, 理解チェック, 訂正, 言葉探し, 認識

要 旨

聞き手がある発話に何らかの問題を見いだしたとき、その問題への修復を開始するひとつの方法は、その発話をどう理解したかを試行的に提示して確認を求めること（理解チェック）である。このとき、話し手が確認を与えるために、「うん」系トークンが用いられる場合と「そう」系トークンが用いられる場合がある。本稿は、会話データの分析を通じて、これら二系列のトークンがどのように使い分けられているのかを調べる。理解チェックがもつばら理解の問題への解決候補だと見なしうるときには「うん」系トークンの使用が基本的であるのに対し、それが理解の問題だけでなく発話産出の問題への解決候補にもなっていると見なしうるときには、この両面にわたる聞き手の貢献を認定するために「そう」系トークンが用いられることを明らかにする。また、修復連鎖において聞き手が提示する解決候補の諸タイプを、理解の問題と発話産出の問題のどちらへの解決だと見なされうるかに注目して、系統的に整理する。

1. はじめに

1.1. 問題の所在

言語コミュニケーションについて考えるうえで、発話産出は話し手の営み、発話理解は聞き手の営みというふうに問題を区分することは、広く行き渡った態度である。だが、発話産出と発話理解のあいだには、こうした区分には収まりきらない複雑な関係がある。

たとえば、話し手は、特定の聞き手に理解できるように発話を組み立てるのがふつうである。聞き手の理解に困難を来す可能性のある言葉は、発話産出の過程でチェックされ、話し手はそれを使うのをやめたり、別の言葉に置き換えたり、言葉を補ったりする。この意味で、理解の問題は、発話が産出され終わったあとでもつばら聞き手が関心を向ける問題というわけではない。

他方、聞き手の方も、たんに産出された発話を理解することにのみ従事しているわけではない。聞き手はしばしば、話し手が正しく、適切な言葉を使って話しているかどうかに関心を向け、間違った言葉を正しい言葉に置き換えたり、話し手が見つけだせなかった言葉を提示したりする。発話産出の問題も、発話が産出され終わったときにはすべて終わっているわけではない。

理解の問題も発話産出の問題も、ともに話し手側からも聞き手側からも、関心を向けられうる

し、対処されうると考えなければならない。このような視点のもと、本稿では、産出された発話への理解候補を聞き手が提示することで開始される修復連鎖（＝理解チェック連鎖）に焦点を当て、そこで理解の問題と発話産出の問題がどのように取り扱われているかを考察する。

次の二つの会話事例を見ていただきたい¹。

(1) ((ピザを食べながら会話している。この断片の直前にはBはテレビを見ている。))

- ① 01 C: あたしもこげてるの欲しい. ((Bの前にあるピザ片を指さして))
02 (0.8) ((Bがテレビの方から手元へと視線を移す))
- ② 03 B: これ? ((自分の前のピザ片に手を添えて))
- ③ 04 C: うん.
05 (0.3)
- ④ 06 B: あげるで.: ((ピザ片を掴みながら))

(2) ((この断片の直前まで2人はテレビを見ている。))

- ① 01 Y: 持田真樹と誰がつき合ってるんやった? これの.
02 (1.8)
- ① 03 Y: 知ってる?
04 (1.1)
- ② 05 D: .hhh 持田真樹ってあの ::::hhhh(1.0)「高校教師」出とった人 :::
06 (1.0)
07 Y: ちゃう、ちゃう方.
08 (2.1)
- ② 09 D: < E L T > の方ゝ
10 (0.9)
- ③ 11 Y: そうそう.
12 (1.5)
- ④ 13 D: 知らん.

(1)と(2)には、大きく二つの共通点がある。第一に、①の発話に対して、②で相手が「修復を開始 (repair initiation)」している。すなわち、①の発話に問題を見いだしたことを示し、その解決を求めている。これによって、本来ならば①の次に生じるべき④の発話が、問題の解決後まで遅らされている。第二に、②で修復を開始する方法として「理解チェック (understanding check)」が行われている。すなわち、①の発話を自分がどう理解したかを晒すことによって、その理解が正しいかどうかの確認を求めている。さらに、理解候補は、問題になっている言葉を別の言葉に置き換える（「こげてるの」→「これ」, 「持田真樹」→「高校教師出とった人」, 「ちゃう方」→「E L Tの方」）ことによって作られている。

二つの事例では、基本的に同じ構造を持つ発話連鎖が進行しているように思われる。だが、明白な違いも見られる。②で提示された理解候補に③で確認を与えるとき、(1)では「うん」が、(2)では「そうそう」が用いられている。どうして、同じような仕方では理解チェックが行われているのに、両者では確認の与え方が異なるのだろうか。この相違は、理解チェック連鎖のどんな特質を反映しており、「うん」と「そう」に代表される肯定トークンのどんな用法の違いを例示しているのだろうか。これが、本稿で解明しようとする中心的問題である。

1.2. 本論の構成

この問題に対して本稿では、次のような手順で分析を進め、答えを出していく。まず、研究の背景を概説したうえで(2節)、理解チェックに用いられる5種類の基本的形式を概観し、理解チェックに確認を与えるための基本的方法は「うん」系トークンの使用であることを明らかにする。とともに、5種類のうち3つに対しては「うん」系トークンしか用いられないのに対し、残りの二つに対しては「そう」系トークンの使用も見られ、特にひとつの種類においては(上の(1)(2)はこのグループに属する)「そう」系トークンの方が優勢になることを指摘し、これを解明すべき謎として提示する(3節)。

次に、この謎を解くための足がかりとして、ひとつの回り道を選ぶ。相互行為の中で生じた問題に聞き手側から解決候補が提示される現象として、理解チェックのほかに「試行的訂正」と「言葉の試行的提示」がある。これら二つは、ともに発話産出の問題に対して聞き手から解決候補が与えられるものである。これらを含む発話連鎖を調べることで、試行的訂正や言葉の試行的提示に対しては、理解チェックの場合と対照的に、用いられる肯定トークンは基本的に「そう」系トークンであることを明らかにする(4節)。

以上2節を通じて、問題への解決候補が聞き手から提示される現象の中で、一方には、基本的に「うん」系トークンが用いられる現象、他方には、基本的に「そう」系トークンが用いられる現象のあることが判明する。これを踏まえて、「そう」系トークンの使用が優勢になる理解チェックに立ち返り、それが以上両者の性格を合わせ持つことを示す。すなわち、理解チェックの中には、聞き手の理解を晒す(=理解の問題の解決候補)と同時に、話し手の用いた言葉よりも望ましい言葉を提示している(=発話産出の問題の解決候補)という性格を持つサブタイプがあり、このタイプにおいては、「そう」系トークンの使用が基本的であることを明らかにする(5節)。

以上の分析を通じて、「そう」系トークンには、発話産出の問題の解決に向けて、話し手自身にはなしえなかった独自の貢献が聞き手からなされたことを認定する、という働きのあることが示される。最後に、この働きが相互行為における装置として利用可能であるという観点から、上記の謎に対するさらなる答えを出していく(6節)。

2. 研究のコンテキスト

2.1. 修復連鎖における理解チェックの位置

修復連鎖については、英語圏の会話分析において、その基本的メカニズムが精力的に解明

されてきた (Schegloff, Jefferson & Sacks 1977; Schegloff 1979, 1992, 1997a, 1997b, 2000, 2003; Jefferson 1987, 2007; Drew 1997; Lerner 2004; Heritage 1984 など)。また、日本語における修復連鎖の特徴についても近年研究が進みつつある (Fox, Hayashi & Jasperson 1996; 西阪 2007; 鈴木 2008)。これらの先行研究が明らかにしてきたところでは、修復とは、自らの先行発話 (成分) かあるいは相手の先行発話の中に、「発話産出・聴取・理解にかかわる問題」を見いだしたことを示すことで開始され (= 修復開始)、問題の種類に見合った解決が果たされる (修復解決) ことによって終了する活動である。それは、さもないと問題源 (あるいはそれを含む発話) の次に生起するはずであった発話 (ないし発話成分) の代わりに、問題解決のための活動を行うことである。

修復は、問題源を含む発話の話し手自身によって開始される (自己修復開始) こともあれば、聞き手によって開始される (他者修復開始) こともある (Schegloff, Jefferson & Sacks 1977)。このうち、他者修復開始には、大きく「依頼タイプ」と「申し出タイプ」の二種類がある²。依頼タイプとは、「え?」「なにが?」「Xってなに?」などのように、解決をもつばら相手に求めるやり方である。申し出タイプとして分類されるのは、問題源を反復すること、問題源を含む発話を自分がどう理解したかを提示すること (理解チェック)、という二つの方法である。本稿で焦点を当てるのは、申し出タイプの一種としての理解チェックである。

聞き手が修復を開始する方法は、問題源および問題の種類をどれだけ明確に位置づけるかに関して序列のあることが指摘されている (Schegloff, Jefferson & Sacks 1977)。「え?」「なに?」などの「無限定な修復開始方法 (open class repair initiator)」(Drew 1997) は、どこにどんな問題があるのかを特定する性能がもっとも弱く、それらを見いだす仕事はもつばら問題源の話し手に委ねられる。理解チェックはこの対極である。それは、聞き手が問題源を含む発話をどのように理解したかを晒すことで、どこにどんな問題が見いだされたかを明示するのみならず、問題への解決候補も提示している。したがって、問題源の話し手に残されるのは、提示された解決候補を受け入れるか、それを正すかだけである。

これ以外にも修復連鎖について多くの知見が蓄積されてきたが、先行研究の中で理解チェック連鎖は比較的研究が手薄な部分である。本稿では、理解チェックが修復開始方法であるだけでなく解決候補でもある点に注目してその特質を探り、この欠落を多少なりとも埋めたい。

2.2. 「うん」系トークンと「そう」系トークン

本稿では、日本語の肯定トークンを大きく「うん」系トークンと「そう」系トークンに分けて議論を進める。「うん」系トークンとは、「うん」「はい」「ええ」「おう」とその発声上のヴァリエーション、およびうなずきを指す。「そう」系トークンとは、「そう」の複数回使用を中心とし、「そう」の1回使用や「そっ」など発声上のヴァリエーションも含む。「そうだ」のように「そう」が他の語と結びついて句をなしている場合は原則として含めない³。これらのトークンは併用されることもあるが、その場合はほとんど「うん→そう」という順序になる。

これら二系列のトークンは日本語の会話できわめて頻繁に多様な仕方で用いられるので、何ら

かの形でこれらを扱っている研究は枚挙にいとまがないが、本稿の分析に直接かかわるものは意外に少ない。北野(2000)の整理に基づけば、本稿で扱うのはいちおう、これらのトークンの「応答」としての用法ということになる。応答としての用法を扱った先行研究には、主として作例に基づくもの(大島 1995; 森山 1989; 定延 2002; 富樫 2002)や主として談話資料の数量的分析によるもの(奥津 1989; 沖 1993)があるが、関心や研究手法が異なるため、そこから得られた知見を本稿と直接突きあわせるのは困難である。本稿の関心は、これらのトークンが実際にどのような用いられているかを発話連鎖の進行との関係で説明することにあるが、この関心を共有する先行研究は、管見の限りでは北野(2000)・串田(2002, 2006)である。ここではとくに密接な関係のある串田(2002, 2006)との関係で本稿の関心を位置づけておく。

串田(2002, 2006)は、ひとりが開始したターンをもうひとりが完了させるという発話連鎖(=協働的ターン連鎖(collaborative turn sequence))において、ターンを開始した者が相手による完了を承認するさいに、二系列のトークンがどんな働きを持つかを調べた。そして、「そう」は「相手が自分に代わってターンを完了した」ことを承認するのに対し、「うん」は「相手が自分に代わって完了しているわけではないが、それがターンの完了である」ことを承認する、という用法の違いを明らかにした。また、これらのトークン以外に、相手が完了に用いた言葉を反復して自分で完了し直すという反応があることも指摘した。

理解チェック連鎖においても、理解候補に確認を与えるには「うん」系トークン、「そう」系トークン、理解候補の反復という三つのやり方が見られる。この点で、理解チェック連鎖と協働的ターン連鎖はよく似ている。本稿では、協働的ターン連鎖において見いだされたのと同様の違いが、理解チェック連鎖にも見られるのかどうかを調べることによって、串田(2002, 2006)の知見を掘り下げることをめざす。

3. 理解チェックとその確認

本節では、理解チェックに用いられる5つの基本的形式(指示語の復元・省略された言葉の復元・再定式化・挿入可能な言葉の提示・置き換え可能な言葉の提示)を概観することによって、理解候補に確認を与える典型的な方法が「うん」系トークンであることを明らかにする。

指示語の復元。第一の形式は、指示語を用いて組み立てられた発話のあとで、指示語の種類に対応する種類の言葉を、試行的に提示することである。「対応する種類」とは、人物を指す指示語ならば人物指示表現、場所を指す指示語ならば場所の指示表現、というように、指示語の種類と提示された言葉の種類が対応していることである(なお、以下の事例ではすべて、問題を含む発話に「*」、その解決候補に「→」、その受け入れに「⇒」を付す)。

(3)((Dは先日、Yのサークルの後輩である荻野と深田に会った。Dがしばらくそのときの荻野の様子を話したあと))

01 D: 深田くんも面白いな: なんか.

* 02 Y: やつはあれでしょ.: 異様に言葉遣いとか丁寧でしょう.

- 03 D : 深田くんやろ : ?
 ⇒ 04 Y : うん.
 05 D : ん .

Yが話題の人物を「やつ」と指示して感想を述べると(02行目)、Dは「深田くんやろ?」(03行目)と尋ねている。この発話は、人物名に「やろ」という確認を求める言葉を上昇抑揚で付しているという特徴を持つので、Yは、①自分の発話の中の「やつ」という指示語に問題が見いだされており、②Dはそれを「深田くん」だと理解している、ことを知ることができる。Yはこれに「うん」を用いて確認を与え(04行目)、修復連鎖を終了に持ち込んでいる。

省略された言葉の復元。これとよく似た第二の形式は、先行発話において省略されていると見なしうる言葉(鈴木 2008)を試行的に提示することである。指示語の復元が先行発話の一部を置き換えるのに対し、こちらは先行発話に言葉を付加するという相違がある。しかし、両者はともに、先行発話の話し手が「明示していないが事実上いつていること」を試行的に明示する手続きだといえる。この類似性は、次のケースを見るとよく分かる。

(4)((Cが麻婆なすを作るとおいしいという、Aは麻婆なすはまだ作ったことがないという。))

- 01 A : 麻婆なすか. nh[hh((鼻をすする音))
 * 02 C : [° (あおれ) ° (0.3) [つれ:-
 03 A : [なすなす. =
 * 04 C : =つれの下宿行って一緒に作ったんです.
 05 (0.3)
 → 06 A : 麻婆なすを?
 ⇒ 07 C : はい.
 08 A : ほ ..

Cが「つれ(=恋人)の下宿行って一緒に作ったんです」と報告すると(02-04行目)、Aは「麻婆なすを?」と尋ねる(06行目)。この発話は、料理名に格助詞「を」を上昇抑揚で付しているという特徴を持つので⁴、Cは、①自分の発話に「作った」の目的語がないことが問題として指摘されており、②Aは目的語を「麻婆なす」だと理解している、ことを知ることができる。Cはこれに「はい」を用いて確認を与え、修復連鎖を終了に持ち込んでいる。

再定式化。第三の形式は、先行発話において用いられたいくつかの言葉を組み替えて、先行発話の内容を「再定式化(reformulate)」することである。この形式は、先行発話が何らかの点で「錯綜」しているという問題(Schegloff 2003)を指摘するのに用いられる。

(5)((Oはその日、定時に帰宅する了解を取っていたのに、夕方いきなり上司に残業を命じら

れ、ものすごく腹が立って))

- * 01 O : .hhhh tch 何な : んとかってバーッハンマー投げてな .hhh どういことやねんって
- * 02 感じでむかついたからな (いっちゃもんとかも) バーン>てゆって<くる - な :
- * 03 台車あったから° な° (.) どうでもええわってバーンて投げてコーンって音がして
- 04 .hhhh[(もう::),
- 05 D : [台車に投げつけたん.
- 06 (.)
- ⇒ 07 O : お(h)お(h): ほんで .hhhh[イライラしと (って)]
- 08 D : [おまえあほやな] :: =

Oがやや興奮気味に語っているのは、上司に残業を命じられたため「何な : ん」「どういことやねん」と「むかつい」て、「どうでもええわ」と「台車」に「ハンマー」を「投げ」つけた、という話であるようだ (01-03 行目)。Oの発話に息を吸うための短い間が空いたとき、Dは「台車に投げつけたん」と尋ねる (05 行目)。この発話は、「台車」「投げ」という言葉を反復しつつ、「に」「つけた」を付加してそれらの関係を明確化し、助詞の「ん」で結んでいるという特徴がある。Oはこれを聞くことで、①自分の発話の中で「台車」と「投げ」の関係が不明瞭なことが問題として指摘されており、②Dはそれを「台車に (ハンマーを) 投げつけた」と理解した、ことを知ることができる。Oはこれを「お(h)お(h)」と確認し、直ちに語りを継続している。

挿入可能な言葉の提示。第四の形式は、先行発話に文法的に挿入可能な言葉を提示することである。これは、先行発話との関係だけでいえば「省略された言葉の復元」と区別がつかないが、会話の先行文脈に表れていない言葉が提示されるという点が異なる。

(6) ((DとYは30分ほど前に一緒にDのアパートにやってきた。この断片の前では2人の共通の友人の家をいつ訪ねるかを話していた。))

- 01 D : 足痛いわ :: =めっちゃ疲れた.
- 02 (0.4)
- * 03 D : °めっちゃ°歩い - だいぶ歩いたやろ.
- 04 (0.7)
- 05 Y : 今日 ?
- 06 (0.3)
- ⇒ 07 D : °うん°.
- 08 (2.0)

Dは「足痛い」「めっちゃ疲れた」と愚痴をこぼし (01 行目)、さらに「だいぶ歩いたやろ」と愚痴の原因がYとの共有体験であることを明らかにして同意を求める (03 行目)。続くYの「今日？」という発話は、時間表現に上昇抑揚を付しているという特徴を持つ。Dはこれを聞くこと

で、①自分がいつのことをいっているのか明示していないことが問題であり、②Yはそれを「今日」だと理解した、ことを知ることができる。Dはこれに小声で「うん」と確認を与え、修復連鎖を終了に持ち込むが（07行目）、Yからは結局、愚痴への共感は得られなかった（08行目）。

置き換え可能な言葉の提示。最後の形式は、先行発話の中の特定の言葉に置き換えられる言葉を提示することである。（1）としてあげた事例を再掲する。

（7）（（1）の再掲）

（（ピザを食べながら会話している。この断片の直前にはBはテレビを見ている。））

- * 01 C：あたしもこげてるの欲しい。（（Bの前にあるピザ片を指さして））
- 02 (0.8) （（Bがテレビの方から手元へと視線を移す））
- 03 B：これ？ （（自分の前のピザ片に手を添えて））
- ⇒ 04 C：うん.
- 05 (0.3)
- 06 B：あげるで. （（ピザ片を掴みながら））

CはBの前にあるピザ片を指さして「あたしもこげてるのほしい」と要求する（01行目）。Bはこの発話の途中でテレビから視線を戻し始め、視線が自分の手元まで来ると、目の前のピザ片に広げた指を添えて「これ？」という（03行目）。この発話には、指さしながら行われたCの発話のあとに、Cが指さしたあたりにある特定のものを動作と発話によって試行的に直示しているという特徴がある。これを聞くことでCは、①自分が何を指示したのかがBにとって十分に明確ではなかったが、②Bはそれを今手を添えているピザ片だと理解したことが分かる。Cはこの理解が正しいことを「うん」と確認し、修復連鎖を終了に持ち込んでいる。

以上5種類は、私のデータベースに見いだされた理解チェックの基本的な形式である⁵。そして、以上に見たように、理解チェックによって問題の指摘と解決候補提示が同時に行われるとき、解決候補を受け入れる基本的方法是「うん」系トークンの使用である。理解チェックに対する肯定的反応としては、（2）に見たような「そう」系トークンの使用や理解候補の反復も見られる⁶、複数の方法の組み合わせも見られる。だが、二つの理由で、「うん」系トークンの使用が基本的であると考えられる。

第一に、理解チェックが基本位置で行われる場合、肯定的反応は圧倒的に「うん」系トークンである⁷。ここで他者修復開始の基本位置とは、話し手自身によって自己修復がなされなかったことを見て取った聞き手が、修復を開始できる最初の機会のことである。これは通常は問題源を含む発話の次のターンであるが（Schegloff, Jefferson & Sacks 1977）、物語りのようなひと続きの長い発話の切れ目に「さしはさまれた修復開始の機会」（Schegloff 2000）である場合もある。上に見たケースではいずれも、理解チェックはこうした位置で開始されている。（5）以外では次のターンにおいて、（5）では、体験談の途上で話し手がひとつのエピソード（ハンマーを台車に投げつけたこと）を語り終えて息継ぎをしたときに、開始されている。

第二に、「うん」系トークンは、以上5種類の理解チェックのすべてにわたって観察された。これに対し、「そう」系トークンが見られたのは、「挿入可能な言葉の提示」と「置き換え可能な言葉の提示」の二タイプのみである。ただ、(2)を一例とする「置き換え可能な言葉の提示」では、大多数が「そう」系トークンによって肯定されていた⁸。この点については5節および6節で事例に則した詳しい分析を行うので、ここでは傾向として指摘するに留めておく。

以上の観察から、次の問が浮かび上がる。どうして、「そう」系トークンは「挿入可能な言葉の提示」と「置き換え可能な言葉の提示」の場合だけに見られるのだろうか。どうして「置き換え可能な言葉の提示」の場合には、「そう」系トークンの使用が優勢になるのだろうか。これらの問に答えていくために、まず少し回り道が必要となる。

4. 試行的訂正・言葉の試行的提示とその受け入れ

4.1. 試行的訂正とその受け入れ

Schegloff らは、英語において理解チェックに用いられる典型的発話形式「You mean X?」が、他方で、「弱められた他者訂正 (modulated other correction)」のための形式にもなることを観察している (Schegloff, Jefferson & Sacks 1977)。日本語においても、置き換えという操作に関して同じことを観察することができる。置き換えは、理解チェックを行う方法になるだけでなく、試行的に訂正を行う方法にもなる。

次にあげる二つのケースでは、問題源となっている言葉を置き換えることで、問題の解決候補が提示されている。ただし、その置き換えは3節で見たものとは異なる。それはすでに修復が開始されたあとで、開始した者とは別の者によって行われている。

(8) ((Dは知人の田崎さんからもらったアニメのキャラクターのミニチュアを手を持っている))

- * 01 D：なんで田崎さんあれ ::(.) ヤッターマンくれんかったんやろな。 =
02 =ヤッターマンちゃうわ。
03 (0.3)
- 04 Y：ガッチャマン? =
- ⇒ 05 D：=ガッチャマン。
06 (.)
- 07 D：hhh [そんな:]
- 08 Y： [よっぽど:: ough 気に入ってたんちゃう？]

Dは自問的な質問を完了可能点まで発話すると (01 行目)、間髪を入れず「ヤッターマン」という言葉を問題源として自ら修復を開始する (02 行目)。が、続いて自己解決は行われず、短い間があく (03 行目)。Yが問題源に置き換わるべき言葉「ガッチャマン」を試行的に提示すると (04 行目)、Dはそれを反復している (05 行目)。ここでは、話し手が自分の用いた言葉に問題

があることに気づいたのを受けて、聞き手の方が正しい言葉の候補を提示し、話し手はそれを肯定している。つまり、試行的に訂正が行われ、それが受け入れられている。

次のケースでは、話し手は試行的訂正を反復して受け入れるだけでなく、「そう」系トークンを合わせて用いている。

(9) ((SとHはさきほどから、高校時代のテストの成績がいかに悪かったかを披露し合っている。この断片の直前では、数学のテストが話題になる。))

01 S : あたし↓めつつちゃがんばってたもんなんかのけん -

02 (0.9)

* 03 H : あの:(.) [説明しなさいってなかつ] た: ?

04 S : [(図画とか才能ないみたいやった)]

05 S : え ?

→ 06 N : 証明 [° (しなさい) °

⇒ 07 H : [証明そう. =そうそう.]

08 S : [あった証明しょう - そ -] セ(h)つ(h)め(h)い(h)ゆって =

09 H : =証明と:, =

03行目でHは、「あの:(.) 説明しなさいってなかった？」と新しい対象を認識することをSに求めている(串田 2008)が、途中からSの発話の続き(04行目)と重なる。Sが「え？」と修復を開始すると(05行目)、すぐにNが「証明」という言葉ではじまる発話を開始する(06行目)。修復が開始された次の位置にあることで、Nの発話は問題の解決の試みと見なされうる。この発話をそこまできくやいなや、Hは「証明そう. =そうそう.」と、提示された言葉の反復と「そう」系トークンを組み合わせた反応を返している(07行目)。

このケースの場合、Hは自分で修復を開始してはいないので、Nの発話は「説明」という言葉に問題があることをHに気づかせる働きも持っている。つまりNは、Sによって開始された修復の問題源を特定するとともに、正しい言葉の候補を提示している。Nによる試行的訂正は、Hの発話が産出されるうえで、H自身によっては「なされえなかった貢献」つまり聞き手Nの「独自の貢献」を行っているのである。話し手が、聞き手の独自の貢献をとくに認定する形で試行的訂正を受け入れたいとき、その仕事のために用いることのできるのが「そう」系トークンだと思われる。

4.2. 言葉の試行的提示とその受け入れ

試行的訂正とよく似ているのは、言葉探し(word search)を含んだ発話が産出されたとき、話し手が探していた言葉を聞き手が試行的に提示するという現象である。

(10) ((Dが、タレントのデイヴ・スペクターはホテル住まいだというと、Yは、そんなはずは

ない、デイヴ・スペクターは高層マンションに住んでるはずだという。))

- * 01 Y : あっ .hhh あれやわ. よ - (0.5) 横浜の ::
02 (1.3) ((Dがうなずく))
03 Y : ° なんやった : ° ?
04 (1.3)
05 Y : なんとかブリッジ.
→ 06 D : ベイブリッジ.
⇒ 07 Y : ベイブリッジ. (0.3) が : すごい一望できるめっちゃ夜景がきれ : く見える
08 .hhh 高そうなホテル. = あホテルちゃう. マンション. = だって (o-) 奥さん
09 手作りで料理作ってたもんいっぱい. ((波線部は定延 (2005) のいうりきみ声))

Yは「あっ、あれやわ」と何か思い出したことを述べる行為を投射するが(林 2008), 「よ-」と言い始めてすぐ中断し, 少しの間のあと「横浜の ::」と音を伸ばすことで修復を開始し (Schegloff. et. al. 1977), 次の言葉を探していることを示している (01 行目)。DはうなずいてYが次の言葉を自分で見つけ出すのを待っているが (02 行目), Yは自分で見つけ出すかわりに「なんやった?」と言葉探しへの協力 (Goodwin 1987) を求める (03 行目)。Dが求めに応じないで間があいたため (04 行目), YはDが求めに応じるための手がかりを増やす (05 行目)。このようにして2回にわたって求められたあと, Dは「ベイブリッジ」と言葉の候補を提示し, Yはそれを反復することで受け入れている (06-07 行目)。

言葉探しに対して聞き手の側から候補が提示される機会は, 協力を求められる以外の形でも作られうる。たとえば次のケースでは, 話し手が言葉探しを断念している。

(11) ((AとBはともに受験期にモーツアルトに「はまって」いた。この断片の直前で歌劇「魔笛」のことが話題になると, Bはその一部を「よく予備校で歌った」という。))

- * 01 B : こ [れやる] とこ ((両手をあげて踊るような動作をしながら)).
02 A : [(ふくしっ-)]
03 (0.5)
04 A : んん?
05 (0.2)
06 A : どれ [い]
* 07 B : [あのっ (0.4) 名前忘れた h.
08 (0.7)
→ 09 A : 鳥刺し?
⇒ 10 B : そうそう [そ : そ :
→ 11 A : [おいらは鳥刺し? =
⇒ 12 B : = > あそ : そ : そ : そ : そ : そ : そ <.

13 (0.9)

14 B : 歌え : たんだけどな : あれ :

Bは、モーツアルトの歌劇「魔笛」の一部をよく予備校で歌ったといい、その曲を、両手をあげて踊るような動作をしながら「これやるとこ」と指示する(01行目)。Aがまず「んん?」と、次いで「どれ」と修復を開始すると(04-06行目)、Bは「あのっ」と曲名を思い出そうとするが、少しの間のあと「名前忘れた」と断念したことを宣言する(07行目)。この断念に機会を与えられる形で、Aは「鳥刺し?」と候補を提示し(09,11行目)、Bは「そう」系トークンによって探していた言葉であることを認定する形で、それを受け入れている(10,12行目)。

上の(10)では、話し手は「なんとかブリッジ」というヒントを出すことで、探している言葉を見つけ出す一歩手前まで行っていた。これに対し、この(11)では、話し手は言葉探しを断念している。したがって、こちらの方ではより大きな程度において、聞き手は話し手によってなされ得なかった貢献を行っている。このことは、試行的訂正についてみたのと同様である。

4.3. 試行的訂正・言葉の試行的提示の受け入れ

試行的訂正と言葉の試行的提示は、話し手の用いた言葉が間違っていたとき、話し手が言葉の選択に関して問題に直面したときに、聞き手からの解決候補として提示されるものである。すなわち、それらは、発話産出の問題に対して、聞き手側から解決候補が提示される現象である。

以上の分析から、発話産出の問題への解決候補を話し手が受け入れる手だては、解決候補の反復と「そう」系トークンの使用であることが分かる。そして、両方法のうち「そう」系トークンは、問題の解決に向けて聞き手が独自の貢献を行っているときに、聞き手が「自分に代わって発話産出上の問題を解決した」ことを認定するために利用されていると考えることができる。この知見を足がかりにして、3節末尾で提示した問に取り組むことにしよう。

5. 認識チェックとその確認

3節の最後に、「置き換え可能な言葉の提示」による理解チェックは、その大多数が「そう」系トークンによって確認を与えられると述べておいた。この観察を掘り下げるため、「置き換え可能な言葉の提示」の中のひとつのサブタイプに注目しよう。それは、その場になく対象が新たに指示されたとき、指示対象を自分が正しく認識したかどうかをチェックするために、言葉が置き換えられているものである。このサブタイプを「認識チェック」と呼ぶ。次がその一例である。

(12) ((Aはキャンパス内で変な女の子を見かけたという体験を語っている。))

- * 01 A : = あっ(.)そう. = ふんで :.(0.6) なんかね(0.3) 音棟のまえ-(.) あそこねず : っと
- * 02 通ってさ :. ((ここまではBを向いて))
- 03 (0.2)
- * 04 A : 行ったんだだけ [ど, ((Cの方を向いて))

- 05 B : [° あっ°、[nhhn((何かを落として、笑う))
 → 06 C : [おんとうとは音楽棟のことかね？
 ⇒ 07 A : そうそうそう、

Aは01行目で、「音棟」という言葉で新しい対象を指示する。Aの語りが一つの区切りを迎えた地点で(04行目)、Cは「おんとうとは」と問題源を明示し、それを「音楽棟」と置き換えて認識候補を提示している(06行目)。この発話では、「おんとう」の指示対象がCにとって確実ではないこと、しかし、Cはそれを聞いて「音楽棟」という名前のもとで知っている対象を認識したことが示されている。そこでAは、Cの認識した対象が自分の指示対象と一致しているかどうかを調べることが可能となる。

Aはこれを「そうそうそう」と肯定している。指示対象を認識することが発話を理解することの一環である限り、認識チェックは理解チェックの一種には違いない。だが、認識チェックというサブタイプに話を限るならば、確認を与えるための基本的方法是「そう」系トークンだと考えられる。なぜなら、①認識チェックの大多数が「そう」系トークンのみによって確認を与えられており、②「うん」系トークンが見られる少数の事例では、「うんそう」のように「そう」系トークンと併用されている、からである⁹。いいかえるなら、認識チェックに対する肯定的反応は、「そう」系トークンを含んでいるか、あるいは、(本稿では触れる余裕がないが)認識候補を反復する形をとるかどちらかである。参与者たちは、認識チェックに対して、試行的訂正や言葉の試行的提示とよく似た形で反応しているわけである。

その場にはない対象を新たに指示するとき、指示表現は受け手がその対象をどのような仕方で知っているかを考慮に入れ、受け手が知っている仕方に合わせて選択される(=受け手デザイン)のが原則である(Sacks & Schegloff 1979)¹⁰。だが、上のケースでは、Cの発話によって、「音棟」よりも「音楽棟」の方がより「受け手に合わせてデザインされた」言葉であったことが明らかにされている。このように、認識チェックは、話し手が指示表現を選ぶさいに受け手デザインという点で最善の選択をしなかったことを顕在化させる。それは、話し手が本来ならば選ぶべきであった語を提示しているという意味で、発話産出上の問題を指摘しつつ、その解決に向けて独自の貢献を行っていると思なされる。

実際、多くのケースにおいて、認識チェックは、話し手自身によってはなしえなかった貢献として、発話連鎖上に配置されている。例えば、すでに(2)としてあげた次のケース。

(13) ((2)の再掲)((この断片の直前まで2人はテレビを見ている。))

- * 01 Y : 持田真樹と誰がつき合ってるんやった？これの。
 02 (1.8)
 03 Y : 知ってる？
 04 (1.1)
 05 D : .hhh 持田真樹ってあの ::hhhh(1.0)「高校教師」出とった人 :: ?

06 (1.0)

07 Y: ちゃう、ちゃう方.

08 (2.1)

→ 09 D: < E L T > の方

10 (0.9)

⇒ 11 Y: そうそう.

01 行目で、Yはテレビの中に映っている人物のうち「持田真樹とつき合ってる」のは誰かを、Dに尋ねている。すぐに答えがない(02行目)ので、そもそもDが答えを知っているのかどうかをYが尋ねる(03行目)と、しばらく間があいてから、Dは「持田真樹って」と問題源を明示しつつ、それを「高校教師出とった人」に置き換えて、認識候補を提示する(05行目)。Yはこの認識候補が誤っていることを「ちゃう」と主張し、自分が指示した人物は「ちゃう方」だと補足することで、自ら問題を解決しようとしている(07行目)。だが、Dは、いささか長い間のあとで「E L Tの方?」と音楽グループの名前をあげて、もう一度認識候補を提示している(09行目)。これにYは「そうそう」と応じている(11行目)¹¹。

このケースでは、Dが提示した最初の認識候補に対して、Yはそれが間違っていることを指摘するだけでなく、「ちゃう方」という形で、Dが正しい認識を得ることを可能にする工夫を行っている。この工夫は、「持田真樹」という人物名を聞いてDが思い浮かべる可能性のある人物が2人いることを当てにしつつ、2人のうちDが認識した方ではない方として、自分の指示対象を特徴づけている。だが、この方法は、その人物が属する音楽グループ名をあげるという方法に比べて、弱い方法である。Dによる「ちゃう方→E L Tの方」という置き換えは、Yが指示対象を特徴づけ直したあとに配置されていることで、Y自身の工夫によっては解決しなかったことを解決する試みとして差し出されている。いいかえれば、Dが提示した「E L Tの方」という言葉は、もしもDが「誰のこと?」などの依頼タイプの修復開始によって求めたとしても、Yからは提示されなかったものという性格を帯びている。

次のケースでは、実際に依頼タイプの他者開始修復が行われている。

(14) ((Bはメキシコ旅行から帰ってきた。))

* 01 B: いやもう - (.) 中華国際乗っつ° (て) °行っでんでおれ.

02 C: なに中華国際って.

03 B: う-、航空会社.

04 (1.7) ((2人は顔を見合っている))

→ 05 C: 燃えたとこ: ? 中学校んとき.

⇒ 06 B: > そうそうそうそう° そうそう° <.

Bの報告(01行目)に対して、Cは「中華国際」と問題源を明示して依頼タイプの修復を開始

している（02行目）。これにBは「航空会社」という解決を与えているが（03行目）、これは対象が認識できないという問題に係わる修復においては、明らかに不十分な解決である。2人がしばらく顔を見合っていたあと（04行目）、Cは自分がこの対象をある仕方を知っていることを示し、認識を確認を求める（05行目）。この認識候補は、話し手が「求められても提供できなかった」解決を聞き手の側から提示するものとして、配置されていることが分かる。

認識チェックは、理解チェックの一種でありながら、発話産出上の問題に対して聞き手の側から独自の貢献がなされる側面もある点で、独特のサブクラスを形成している。それは、ひとことで言えば、「受け手デザインに関するより望ましい選択を顕在化させる形で理解をチェックする」手続きである。認識チェックは、このように理解の問題と発話産出の問題の両面にわたる解決候補でありうるため、それへの反応としては、「理解を確認を与えること」と「発話産出上の問題への解決を受け入れること」の両面にまたがった反応が求められていると考えられる。そして、「そう」系トークンを用いるならば、相手の独自の貢献を認定することによって、この両面への反応を一挙に行うことができるのだと考えられる¹²。

以上から、3節で「置き換え可能な言葉の提示」の事例としてあげた（7）＝（1）で、「うん」系トークンが用いられていることも理解可能になる。この事例では、理解チェックに用いられた言葉は「これ?」という直示表現である。この直示表現は、少し離れた場所にいる話し手にはそもそも利用可能でないで、話し手が本来ならば使うべきであった言葉とは見なされえない。認識チェックというサブタイプがその場になく対象の指示によって定義されたのは、（7）のような直示による理解チェック事例のこの特殊性を考慮してのことである。直示による理解チェックにおいては、認識チェックと同様に話し手の用いた言葉が置き換えられてはいるものの、それが発話産出上の問題の解決候補と見なされることは生じにくいのだと考えられる。

6. 独自の貢献を見いだすこと

3節末で述べたように、認識チェック以外でも、「置き換え可能な言葉の提示」や「挿入可能な言葉の提示」がなされた場合、話し手は「そう」系トークンを用いることがある。本節では、これらの事例に焦点を当て、「そう」系トークンが後続する発話産出の足がかりを築く装置として利用できることを示すことで、以上の記述をさらに掘り下げる。

「挿入可能な言葉の提示」と「置き換え可能な言葉の提示」は、話し手が「事実上知っていること」以外の言葉を用いて理解チェックがなされる点で、他の3つの理解チェック形式に比べて、独自の貢献が見いだされやすい性格を持っている。とくに語りや説明など、複数の文や節を連ねたひと続きの長い発話を話し手が産出している途中で、相手の理解チェックのうちに独自の貢献を見いだすことは、後続する発話産出のための足がかりとして利用されうる。

(15) ((Yの知人「山野さん」には、電通に勤めている友だちがいて))

01 D: ふ [:: ん.

* 02 Y: [hhhそれで::なんか.hhあ:のその関係でベルリンフィルのチケットを

- * 03 取れたとかゆって:行こうってゆうことになったらしいねんけど、
 04 (0.5)
 → 05 D:日本で?
 06 (0.5)
 ⇒ 07 Y:((頷いて)) そうそう. =ふんで減多にない機会やし、, (0.2)ま:若いうちに
 08 (いっと-) 1 回ぐらいて感じて. .hh しかもチケットいくらやと思う?

これは「挿入可能な言葉の提示」の事例である。Yは、知人がコネを使って「ベルリンフィルのチケットを取」ることができ「行こうってゆうことになった」と語っている(02-03行目)。この発話がDにとって十分に明確でなかったことが「日本で?」という質問によって示されている(05行目)。この発話によって、Dは「ベルリンフィルのチケットを取れた」ということが外国(ドイツ)公演の可能性もあることに注意を向けていることが分かる。だが、Yの語りでは、コンサートの場所については何も述べられておらず、それが日本だということは自明の文脈として当てにされている。

Yに求められているのは、さしあたりDの理解に確認を与えることである。実際、Yはまずうなずいている。だが、Dの理解チェックは、上に述べた意味でいわばYの「盲点」を突いたものである。もしも、Dに向けてこの物語をより効果的に語るうえで、この盲点に照準を定めて語りを組み立て直す方がよいならば、YはDが独自の貢献を行ったことを認定し、それを後続する発話産出の足がかりにすることもできるだろう。Yはこの後者の選択をしたと思われる。

Yはうなずいたあとで「そうそう」といっている。そして、間髪を入れずにYが行っているのは、コンサートが日本でのものであることに焦点を当てて語りを組み立て直すことである。第一に、チケットを取れるのが「減多にない機会」で、だから「若いうちに1回ぐらい」と思っで行こうとしたことは、コンサートが「日本で」のものであることの意味をひもといている。第二に、この後続部分は、出来事の時間順からいえば「行こうってゆうことになった」の前に挿入されるべきことであり、次のエピソードではない。このケースでは、「うん」系トークン(うなずき)で理解に確認を与えるとともに、「そう」系トークンによって発話産出にかかわる独自の貢献を認定することで、語りを組み立て直す足がかりが作られていると考えられる。

「そう」系トークンのこうした利用は、次のケースのように、いったん「うん」系トークンで理解を確認してから遅れて「そう」系トークンを用いる場合、より明確になる。

(16)((Cは自分が「なぜあんなにすぐ眠くなるか」を説明している。今いるAの部屋のようにこたつがあれば、テレビを見るときこたつに入って見られるが、Cの部屋にはこたつがないので、))

- * 01 C:>あたしの場合寒い<から:ふ↑とんに入って見ちゃうん[やんか:..
 02 B: [うん..
 03 (.)

- 04 C : そ:うするとや(h)っぱりふと [んに入っ -
→ 05 B : [えっ上から見てるわけ?
⇒ 06 C : うん.
07 (0.8)
08 B : は. は. は. [は.
⇒ 09 C : [そ:うそう. = ↑だからあたしの:(0.3)うちの(.)¥テレビの位置
10 わかると¥思うけど (h) ;
11 (0.5)
12 C : テ(h)レ(h)¥上から見えるようにちゃんとセッティング¥してんねん.

これは「置き換え可能な言葉の提示」の事例である。Cが「あんなにすぐ眠くなる」理由は、Cの部屋にはこたつがないので、寒いとき布団に入ってテレビを見てしまうためだ、という(01行目)。Bは、いったんここまでの説明を理解したことを主張するが(02行目)、Cが説明を続けかけたとき修復を開始し、「ふとんに入って」という問題源を「上から」に置き換えて、理解候補を提示している(05行目)。Bは「ふとん」という言葉が「ベッド」のことだという理解に確認を求めているわけである。

Cはまずこれに「うん」と確認を与えるが(06行目)、Bがあらためて説明を受け取っている最中に(08行目)、「そうそう」を前置きに用いて、Bの発話を足がかりとしていることが分かるようにデザインされた説明(自分はテレビを「上から見える」ようにセッティングしている)を追加している(09-10行目)。このケースの場合、置き換えられた「上から」という言葉を聞くことで、BがCの部屋の様子を思い浮かべつつ理解を確かめていることがCにはわかる。そこで、今やCの部屋の様子を思い浮かべているBに向けて、Cは説明を組み立て直すことが可能となる。このために、Bの独自の貢献を認定することが、足がかりとして利用されているのである。

7. 結論

本稿では、理解チェックの5つの基本形式を概観したのち、「挿入可能な言葉の提示」と「置き換え可能な言葉の提示」においてのみ「そう」系トークンの使用が見られ、とくに後者においてそれが優勢になるのはなぜか、という問を掲げた。4節以降の分析はこの間に答える作業であった。その答えをもう一度まとめておこう。

「置き換え可能な言葉の提示」の中には、認識チェックというサブタイプがある。認識チェックは、話し手自身が選んだ指示表現よりもより「受け手に合わせてデザインされた」指示表現を聞き手が提示することを含む。だから、この手続きは聞き手の理解を晒すと同時に、発話産出における問題への解決候補を提示するという二面性を持つ。「そう」系トークンは、話し手自身にはなしえなかった発話産出上の独自の貢献を聞き手が行ったことを認定するという働きを持つがゆえに、認識チェックをその両面にわたって一挙に受け入れるのに好適である。だから認識チェ

ックに対しては「そう」系トークンの利用が基本的になる。

さらに、「そう」系トークンのこの働きは、相互行為における装置としてさまざまな実際の関心を満たすために利用可能である。「挿入可能な言葉の提示」や「置き換え可能な言葉の提示」のように、話し手が「事実上いっていること」以外の言葉を用いて理解チェックが行われる場合、話し手はそこに独自の貢献を見いだして認定することで、後続する発話産出上の足がかりを築くこともできる。このため、これら二つの形式においては「そう」系トークンがしばしば利用可能になる。以上2段階の記述によって、本稿では上記の問に答えを出したわけである。

この答えを導き出す過程で、本稿では、5種類の理解チェックに加えて、試行的訂正や言葉の試行的提示に目配りをしてきた。これらの手続きはみな、相互行為の中である発話に問題が見いだされたとき、その解決候補が聞き手側から提示されるという共通性を持っている。以上の探究から、聞き手側からの解決候補提示の諸タイプは、理解の問題と発話産出の問題のどちらへの解決だと見なされうるかに関して、図1のように位置づけて整理することができる。

まず、理解をチェックする形式のうち「指示語の復元」「省略された言葉の復元」「再定式化」の三者は、原則として、もっぱら理解の問題への解決候補と見なされる。それは、これらの形式が、話し手が「事実上いっていること」を明示化する形で産出されているからだと考えられる。これらの方法が用いられたのを見るならば、話し手は特別な事情がない限り、自分の発話に関する発話産出上の問題が指摘されたとは見なさないであろう。そして、これらの理解候補を見た話し手が、そこで理解の問題が解決されていることに確認を与えたいとき、利用できる基本的リソースが「うん」系トークンだと考えられる。

他方、この反対の極にある試行的訂正と言葉の試行的提示は、原則として、もっぱら発話産出

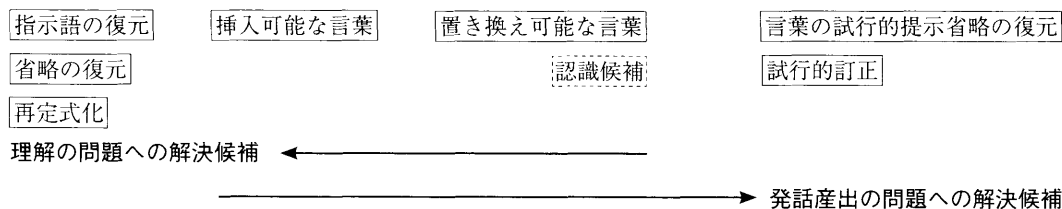


図1 修復連鎖における聞き手からの解決候補の相対的位置

の問題への解決候補と見なされる。これら発話産出の問題への解決候補を受け入れるのには、解決候補の反復と「そう」系トークンが利用可能である。このうち、「そう」系トークンは、その解決が話し手自身にはなしえなかったものであるという意味で、相手が独自の貢献を果たしていることを認定するために利用可能なリソースだと考えられる。

この両極の間には、「挿入可能な言葉の提示」、「置き換え可能な言葉の提示」（およびそのサブタイプである「認識候補の提示」）がある（図1ではサブタイプであることを示すために点線で囲ってある）。「挿入可能な言葉」と「置き換え可能な言葉」は、理解候補と見なされうるだけ

でなく、しばしば、それに加えて発話産出の問題への解決候補とも見なされうる。これらの手続きは、話し手が「事実上いつていること」以外の言葉を用いて産出されているからである。話し手は、挿入されたり置き換えられたりした言葉が「受け手デザインという点でより適切な言葉」や「後続発話のために利用可能な足がかり」であるかどうかを調べることができる。

以上のように、本稿の探究のひとつの成果は、理解チェックの諸形式が全体としての修復連鎖の中にどのように位置するのかについて、先行研究でなされた他者修復開始方法としての位置づけに加えて、それらが聞き手側から提示される解決候補でもあるという観点から、位置づけを示したことである。他方、この探究のもうひとつの成果は、ここで見いだされた「うん」系トークンと「そう」系トークンの働きの差異が、協働的ターン連鎖に関して先行研究で指摘された差異とパラレルだということである。

いずれにおいても「そう」系トークンは、発話産出にかかわって、話し手自身にはなしえない貢献を「相手が話し手に代わって行った」ことを認定するために用いられる。協働的ターン連鎖においては、発話産出のうち「開始したターンを完了させる」という仕事が肩代わりされており、理解チェック・試行的訂正・言葉の試行的提示においては、発話産出のうち「適切な言葉を選択する」ことが肩代わりされている。このことは、さらにほかの発話連鎖における「そう」系トークンの使用についても、「話すことの肩代わり」という観点から記述できるかどうか、調べてみるのが有望であることを示唆している¹³。

実際の言語コミュニケーションにおいて、理解の問題と発話産出の問題は複雑に絡み合っている。図1に整理した「修復連鎖における聞き手からの解決候補の相対的位置」は、二つの問題が参与者自身によってどのように区別され、またときには重ね合わされて取り扱われるのかを明らかにしている。他方、「そう」系トークンの働きの解明は、そうした重ね合わせを実現する具体的な装置のひとつを明らかにする作業であったということになる。

注

- 1 会話データに用いる転記記号の意味は以下の通り。

[]	：オーヴァーラップの開始・終了位置。終了位置は示されない場合もある。
=	：行末から行頭への、または発話を構成する単位の切れ目ない接続。
(数字)	：沈黙の秒数。ごくわずかの沈黙は (.) で示す。
文字、	：沈黙はないが、そこで声門閉鎖などで区切りがつけられている。
文字：	：直前の音の引き延ばし。コロンの数は、引き延ばしの相対的長さ。
文字 -	：直前の語や発話の中断
. , ? &	：下降調の抑揚。継続調の抑揚。上昇調の抑揚。やや上昇調の抑揚。
↑ ↓	：直後で急激なピッチの上昇。下降。
文字 °文字	：強く発声されている部分。弱く発声されている部分。
¥文字¥	：この記号で囲まれた部分が笑いを帯びた声質で発話されている。
h (h) .h	：呼気音。発話に重なった笑い音。吸気音。

< A > > B < : 発話の速度。Aはゆっくり、Bは速く発話されている。
 (文字) (……) (X/Y) : よく聞き取れない部分。聞き取れない部分。両方に聞こえる部分。
 ((文字)) : 転記者による注釈や説明。

- 2 他者修復開始方法の基本的分類は Schegloff, Jefferson & Sacks (1977) で行われているが、「依頼タイプ」「申し出タイプ」という名称は UCLA における Schegloff の講義で用いられたものである。
- 3 ただし、「そうそう」の丁寧形としての「そうですそうです」などは含める。このトークンの分類は、修復連鎖における諸トークンの使用例を調べる中で形成されたもので、先行研究の多くよりもかなり限定された対象に関わっている。ただ、実際の会話での使用例を見ることで、作例による研究では見落とされている重要な違いが見いだされた面もある。たとえば、大島 (1995) では「そうです」「そうだ」「そう」が同様のふるまいを示すとされているが、実際の相互行為において「そうだ」やその丁寧形としての「そうです」と「そう」のふるまいは大きく異なる。
- 4 省略されていると思われる言葉を対象として他者修復が開始される場合、助詞が付加されるのが原則であることについては鈴木 (2008) が明らかにしている。
- 5 本稿の分析に用いたデータベースは、①愛媛県の大学生の大学ゼミ室における日常会話、②大阪府の大学(院)生が大学ゼミ室・大学食堂・アパート・アルバイト先で友人・知人・同僚・家族と行った日常会話、③大阪府の大学野球部の練習メニュー打合せ、④大阪府の学童保育所での指導員会議、⑤大阪府の学童保育主催キャンプ参加者の飲み会、⑥長野県の統合失調症グループホームでのインフォーマルな聞き取り、および、⑦国立国語研究所の『日本語話し言葉コーパス』中の「自由対話」ひとつを含む、約 20 の会話場面である(「約 20」という曖昧な数え方をしているのは、収録中に参加者全員が中座してまた戻ってくるなど、何をもって一場面と見なすかを決めたい事例が複数含まれているためである。場面の定義しだいでは、場面数はこれより多くなる)。なお、これらの場面の会話者の人数は 2 人から 8 人までである。
- 6 理解候補の反復による確認は本稿で主題的には取り上げないが、一例として注 12 の事例(18)を参照されたい。
- 7 データベース中に見いだされた理解チェックの総数は 218 である。このうち肯定反応の返された事例が 141 あり、その中で「うん」もしくは「そう」を用いた肯定反応事例が 128 あった。この 128 事例が、本稿の直接の分析対象である。その内訳は、指示語復元 7、省略復元 15、再定式化 21、挿入可能言葉 37、置き換え可能言葉 48 である。また、128 事例中、基本位置での理解チェックは 74 例見られ、これへの反応内訳は「うん」系トークン 58、「そう」系トークン 11、併用 5 である。
- 8 挿入可能言葉 37 事例への反応内訳は「うん」系 27、「そう」系 8、併用 2 であり、置き換え可能言葉 49 事例への反応内訳は「うん」系 15、「そう」系 27、併用 7 である。
- 9 置き換え可能言葉 48 事例のうち、認識チェックは 23 事例見られた。その反応内訳は、「そう」系 18、併用 5 で、「うん」系は見られなかった。
- 10 「受け手が知っている仕方」の区別として基本的なのは、名前を知っている／属性・特徴を知っているという区別だが、それぞれの中にさらに多様な区別がありうる。たとえば、人物の名前を知っていることには、氏名／姓／名／あだ名のどれを知っているかという区別がありうる。指示と受け手デザインという論点について詳しくは、さしあたり串田 (2008) を参照されたい。

- 11 DとYのあいだでは、間違った答えが正しいものとして決着したと思われる。「持田真樹」はテレビドラマ「高校教師」に出演していた女優であり、音楽グループE L Tのヴォーカリストは「持田香織」である。もちろんこのことは、この会話の分析にとってはなんら問題ではない。
- 12 「理解に確認を与えること」と「発話産出にかかわる解決候補を受け入れること」を切り離して別々に行うことも可能である。次のケースでは、Bは「理解候補の反復+「うん」」という手続きを用いている。この二つのリソースを組み合わせることで、「発話産出にかかわる解決候補の受け入れ」と「理解に確認を与えること」が行われていることが分かる。
- (18) ((ロック音楽のビデオを見ながら))
- * 01 B: これ武井も好きや(で).
- 02 C: アイアンメイデン?
- ⇒ 03 B: アイアンメイデン. うん. =
- 04 C: =ふん. =
- 13 Schegloff(2007) は、相互行為の組織化に関わる「一般的秩序」として、①ターンテイキング、②行為の構成、③発話連鎖、④修復、⑤言葉の選択、⑥全域的構造組織をあげている。これに照らすと、「開始したターンを完了させる」ことは①に関わる仕事、「適切な言葉を選択する」ことは⑤に関わる仕事という位置づけができ、②③⑥に関わって「話すこと」が「肩代わり」されるときに「そう」系トークンが使用されるかどうか、探究課題として浮かび上がる。

参考文献

- 大島資生(1995)「応答句の「そうです」の機能について」『日本語研究』15, 109-119, 東京都立大学国語学教室
- 沖久雄(1993)「肯定応答詞と否定応答詞の体系」『日本語学』12(4), 58-67, 明治書院
- 奥津敬一郎(1989)「応答詞「はい」と「いいえ」の機能」『日本語学』8(8), 4-14, 明治書院
- 北野浩章(2000)「応答やあいづちに用いられる照応的な「そう」について」『言語学研究』19, 79-94, 京都大学言語学研究会
- 串田秀也(2002)「会話中の「うん」と「そう」－話者性の交渉との関わりで－」定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』, 5-46, ひつじ書房
- 串田秀也(2006)『相互行為秩序と会話分析:「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社
- 串田秀也(2008)「指示者が開始する認識探索:認識と進行性のやりくり」『社会言語科学』10(2), 96-108, 社会言語科学会
- 定延利之(2002)「「うん」と「そう」に意味はあるか」定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』, 75-112, ひつじ書房
- 定延利之(2005)『ささやく恋人, りきむレポーター』岩波書店
- 鈴木佳奈(2008)「「なにかが欠けている発話」に対する他者開始修復－会話の事例から「文法項の省略」を再考する－」『社会言語科学』10(2), 70-82, 社会言語科学会
- 富樫純一(2002)「「はい」と「うん」の関係をめぐって」定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』, 127-157, ひつじ書房
- 西阪仰(2007)「繰り返して問うことと繰り返して答えること:次の順番における修復開始の側面」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』37, 133-143, 明治学院大学社会学部附属研究所

- 林誠 (2008) 「相互行為の資源としての投射と文法：指示詞「あれ」の行為投射的用法をめぐって」
『社会言語科学』 10(2), 16-28, 社会言語科学会
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』 1, 63-88, 大阪大学文学部日本学
科 (言語系)
- Drew, P. (1997) 'Open' class repair initiators in response to sequential sources of troubles in
conversation, *Journal of Pragmatics* 28, 69-101.
- Fox, B. A., M. Hayashi & R. Jasperson (1996) Resources and repair: A cross-linguistic study
of syntax and repair, In E. Ochs, E. A. Schegloff & S. A. Thompson(eds.) *Interaction and
Grammar*, 185-237, Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodwin, C. (1987) Forgetfulness as an interactional resource, *Social Psychology Quarterly* 50,
115-131.
- Heritage, J. (1984) A change-of-state token and its sequential placement, In J. M. Atkinson & J.
Heritage(eds.) *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, 299-345, Cambridge:
Cambridge University Press.
- Jefferson, G. (1987) On exposed and embedded correction in conversation, In G. Button & J. R. E.
Lee(eds.) *Talk and social organization*, 86-100, Clevedon: Multilingual Matters.
- Jefferson, G. (2007) Preliminary notes on abdicated other-correction, *Journal of Pragmatics* 39,
445-461.
- Lerner, G. (2004) On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction:
Grammar as action in prompting a speaker to elaborate, *Research on Language and Social
Interaction* 37(2), 151-184.
- Sacks, H. & E. A. Schegloff (1979) Two preferences in the organization of reference to persons
in conversation and their interaction, In G. Psathas(ed.) *Everyday language: Studies in
ethnomethodology*, 15-21, New York: Irvington.
- Schegloff, E. A. (1979) The relevance of repair to syntax-for-conversation, In T. Givon(ed.) *Syntax
and semantics. Volume 12: Discourse and syntax*, 261-286, New York: Academic Press.
- Schegloff, E. A. (1992) Repair after next turn: The last structurally provided place for the defence
of intersubjectivity in conversation, *American Journal of Sociology* 95, 1295-1345.
- Schegloff, E. A. (1997a) Practices and actions: Boundary cases of other-initiated repair, *Discourse
Processes* 23, 499-545.
- Schegloff, E. A. (1997b) Third turn repair, In G. R. Guy, C. Feagin, D. Schiffrin & J. Baugh(eds.)
*Towards a social science of language: Papers in honor of William Labov. Volume 2: Social
interaction and discourse structures*, 31-40, Amsterdam: John Benjamins.
- Schegloff, E. A. (2000) When 'others' initiate repair, *Applied Linguistics* 21(2), 205-243.
- Schegloff, E. A. (2003) Overwrought utterances: 'Complex sentences' in a different sense, In J. L.
Bybee & M. Nooman(eds.) *Complex sentences in grammar and discourse: Essays in honor of
Sandra A. Thompson*, 321-336, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Schegloff, E. A. (2007) *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis* 1,
Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., G. Jefferson & H. Sacks (1977) The preference for self-correction in the
organization of repair in conversation, *Language* 53(2), 361-382.

付 記

本論文は、平成 19 年度～22 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「現代日本語感動詞の実証的・理論的基盤構築のための調査研究」（研究代表者：友定賢治）による研究成果の一部である。本論文の元になった発表に対して、同研究メンバー諸氏から有益な助言をいただいたことに感謝する。また、本論文の草稿に対して、鈴木佳奈さんから貴重なコメントをいただいた。記して感謝する。

（投稿受理日：2008 年 6 月 18 日）

（最終原稿受理日：2008 年 10 月 29 日）

串田 秀也（くしだ しゅうや）

大阪教育大学

582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1

kushida@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

Problem in understanding and problem in speaking:

Uses of *nn*-type and *soo*-type tokens in response to understanding check in Japanese conversation

KUSHIDA Shuya
Osaka-Kyoiku University

Keywords

repair, understanding check, correction, word search, recognition

Abstract

When a hearer finds some problem in an utterance, one way of initiating repair is to offer a candidate understanding of the utterance. To confirm such understanding, two types of response tokens, *nn*-type tokens and *soo*-type tokens, are available to a trouble-source speaker in Japanese conversation. This paper explores how the two types of tokens are differentially used to confirm a candidate understanding. By analyzing five basic sequence types initiated by an understanding check, it shows that whereas *nn*-type tokens simply confirm the understanding, *soo*-type tokens not only make a confirmation but also appreciate that the hearer has made assistance by offering better words for what the speaker wanted to say. In conclusion, these two types of tokens are resources for a trouble-source speaker to show how he/she determines the type of trouble located by an understanding check.